



省力的にてん茶の品質向上 —化学繊維被覆によるてん茶栽培—



てん茶栽培における被覆方法（左：^{ほん}本す被覆 右：化学繊維被覆）

（畑地技術実験農場開発）

背景

愛知県にてん茶栽培は1906年に西尾市で始まり、矢作川下流地域で急速に発展してきました。現在、県内にてん茶生産量は505 t (2015年産)で、全国2位の生産量となっています。

てん茶は、収穫した茶葉を蒸して揉まずに乾燥したもので、てん茶を石臼で挽くと抹茶になります。てん茶栽培では、茶のうま味成分を増やし、渋みを減らすために新芽を1ヶ月程度被覆します。

1960年代、本す被覆（よしず稲わらを乗せたもの）から化学繊維利用による被覆への切り替えが試みられていました。しかし、慣行法に比べ収量や品質の低下は免れませんでした。そこで、良質なてん茶を安定的かつ省力的に生産することを目指し、栽培管理技術の研究を進めました。

成果の内容

化学繊維被覆によるてん茶栽培において、被覆法、施肥法、品種並びに茶樹の仕立て法等が収量・品質へ及ぼす影響を明らかにし、省力的に品質の高いてん茶を生産するための栽培管理技術を組み立てました。さらに、機械摘みに適した栽培管理技術についての検討も進めました。

愛知県農業への貢献

本す被覆及び手摘み収穫から化学繊維被覆並びに機械摘み収穫への切り替え時において、品質・収量の優れた栽培管理方法を確立し、愛知県てん茶の生産安定に寄与しました。

（東三河農業研究所）